

奄美群島文化の多様性の起源

高宮広土

The Foundations of the Cultural Diversity: The Beginning of Agriculture in the Central Ryukyus

TAKAMIYA Hiroto

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

Research Center for the Pacific Islands, Kagoshima University

要旨

世界的にみて農耕のはじまりはしばしば文化の多様性をもたらす。奄美諸島を含む南島中部圏では狩猟採集の時期があり、その後農耕が生業の中心となっていくことが理解されているが、狩猟採集から農耕への変遷のタイミングに関するデータはほとんどなかった。しかしながらフローテーション法の導入や低湿地の発見・調査および炭化穀類を含む出土植物遺体の炭素 14 年代測定法により、この地域における農耕の始まりの時期がかなり判明してきた。奄美諸島ではその年代は 8 世紀～11 世紀であり、沖縄諸島では 10 世紀～12 世紀であった。つまり、農耕は北から南へ拡散したようであるが、そのタイミングはほぼ同時期と考えてよいであろう。

現代の文化の多様性をもたらした最大の要因の一つは約一万年前に開始された農耕であった。その結果約 6,000 の文化が今日世界には存在する。奄美諸島を含む琉球列島南島中部圏においても農耕の始まりは劇的な文化の進化及び多様性を生み出した。この地域では、いつ頃農耕への変遷があったのであろうか。

南島中部圏（奄美・沖縄諸島）における農耕の始まりは考古学者のみならず、他分野の研究者（例えば柳田國男）をも魅了してきたテーマであった。その結果、1990 年代までにこの地域における農耕の始まりとして少なくとも 7 つの仮説が提唱されていた。この事実は多くの研究者が南島中部圏における農耕の始まりに興味を抱いていたかということを示唆する一方、実はこのテーマを検証するデータが十分に揃っていなかったことを物語るものでもある。

1990 年代前半以降遺跡より炭化植物遺体を回収するために開発されたフローテーションという方法が奄美・沖縄諸島の発掘調査に導入されている。「奄美・沖縄では植物遺体の回収は難しい（当時の埋蔵文化関係者）」と指摘され、実際この 20 年程で回収された植物遺体はそれほど多くはなかった。しかしながら、その回収された少量の植物遺体からこの地域における農耕の始まりに関して以下の重要な点が判明しつつある。まず、貝塚時代には農耕が営まれていたという仮説も提唱されたが、この時代は漁労狩猟採集の時代で主に堅果類が植物食として大きな役割を果たしていた。

次に、喜界島に所在する城久遺跡群の遺跡のうち半田中西遺跡、半田前田遺跡、大ウフ遺跡、小はね遺跡および笠利町に所在する赤木名グスク遺跡から栽培植物が検出され、それらを直接炭素 14 年代法により測定した結果 8 世紀～11 世紀に属することが判明した。城久遺跡群出土の栽培植物の一部は琉球列島最古の物でもある。興味深いことに喜界島の遺跡はコムギやオオムギが主であったのに対し、赤木名グスク遺跡ではイネが大半を占めていた。さらに、ここ 5 年ほどでは沖縄島で最古の栽培植物をウガンヒラー北方遺跡(読谷村)、小堀原遺跡(北谷町) および屋部前田原貝塚(名護市) より回収することに成功した。これらの遺跡より検出された栽培植物を炭素 14 年代法で測定すると約 10 世紀～12 世紀であった。この結果から、農耕の始まりは北から南へと拡散したことが示された。しかしながら、この拡散は長い先史時代を考慮するとほぼ同時期であったとも解釈できる。また沖縄島の栽培植物はアワが重要であったようである。

近年の研究調査により南島中部圏における農耕の開始期が漸く明らかになった。今後の課題として、狩猟採集から農耕への変遷の要因を検証する必要がある。また、喜界島、奄美大島北部および沖縄島では異なる農耕のシステムが存在した可能性が提示されているが、この点もさらに探求する必要がある。最後にこのような農耕のシステムがその後どのように奄美・沖縄諸島の文化の多様性に寄与したのかも重要な研究テーマである。